

総合科学の基礎C 哲学・思想の基礎

学部共通科目(2017年度)

第13回 倫理的な正しさとは
何か その2

コミュニタリアニズムの立場

3.3 マッキンタイアのコミュニタリアニズム

(1) 伝統的社会から近代社会へ—個人の出現—

多くの前近代の伝統的社会においては、**個人**が自分自身を同定し、また他者によって同定されるのは、さまざまな「**社会集団の一員**」であることを通してであった。私は**兄弟**であり、**従兄弟**であり、**孫**であり、また**この家族、あの村、この部族の一員**であるということである。それらは「**私なるもの**」の部分であり、少なくとも部分的にそしてときには完全に「**私の責務と私の義務**」を明確にするものである。諸個人は「**連結した一揃いの社会的諸関係の内部における特定の空間**」を受け継ぐ。(マッキンタイア『美德なき時代』)

客観的で非人称的な[個人に言及しない]評価の第一の対象として、人生全体を考えると、つまり所与の個人の特定の行為や事業に対する判断内容を供給するようなタイプの評価の対象として人生全体を考えることは、近代に向かったの進歩の過程のある時点で一般的な有効性をもたなくなった。その事態は、自画自賛すべき利益として、「**個人の出**現」として祝われた。(マッキンタイア『美德なき時代』)

(2) 道徳の正当化という啓蒙主義の企て —カント道徳論の批判—

カントの道徳哲学において中核となっている二つのテーゼ

- 1) もし **道徳の規則** が理性的ならば、ちょうど算術の規則と同じ仕方で、それらはすべての 理性的存在者にとって同一でなければならない。
- 2) もし 道徳の規則がすべての理性的存在者に対して拘束力を有するならば、そうした存在者がそれらの規則を実践する能力をたまたまもっているかどうかは、重要ではないはずだ。—重要なことは、実践しようとする彼らの意志だ。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

カントはすべての人が実際に幸福を望んでいることを疑っていないし、また考えられうる最高善は、個人の道徳的完成がそれにふさわしい幸福によって報われるという善であることも疑っていない。しかし彼は、にもかかわらず、われわれの**幸福の概念**は、頼りになる道徳的指針を与えるには、余りにも曖昧で変わりやすい、と信じている。その上、われわれの幸福を確保するために作られたいかなる教えも、ただ条件つきで成立する規則の表現である。ところがカントによれば、**道徳法則のすべての真正な表現は無条件的な定言的性格をもっている。**→続く

そうした表現はわれわれに**仮言的〔条件つきで〕に命令するのではなく、端的に命令する**。カントによれば、実践理性はそれ自身にとって外的な基準を何も用いない。それは、経験から引き出されたいかなる内容にも訴えない。**理性が普遍的、定言的および内的に首尾一貫した諸原則を定めるのは、理性の本質に属することである**。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

【補足】定言的、格率

- **定言的**とは、無条件に成り立つこと。したがって、定言命法とは無条件的に成り立つ命法(命令)＝道德法則である。
- **格率**とは法則や原則と違って、主観的原理である。カントは主観的原理である、格率が普遍化できるかどうかを重視する。普遍化できれば、それは(道德法則)になることができる。

カント自身は、「つねに真実を語れ」、「つねに約束を守れ」、「困っている人には親切にせよ」、「自殺をするな」のような格率は彼のテストに合格し、他方で「あなたに好都合なときだけ約束を守れ」のような格率は合格しないことを証明しようとしている。カントは**道徳は普遍的に成り立たねばならない**と考える。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

個人の特殊な利害に関わるような行為の主観的原理たる格率は道徳法則とはならない。格率が道徳法則となるかどうかは、それが普遍的に成り立つかどうかでテストされる(普遍化可能性のテスト)。マッキンタイアはカントの道徳論を批判するために、「私を除くあらゆる人を手段として扱え」という格率が不道徳であっても、首尾一貫して成り立つと述べ、カントが道徳の格率と見なすものを、彼が理性と見なすものの上に基礎づける試みは失敗したと主張する。(マッキンタイア『美徳なき時代』)←このカント批判は不当

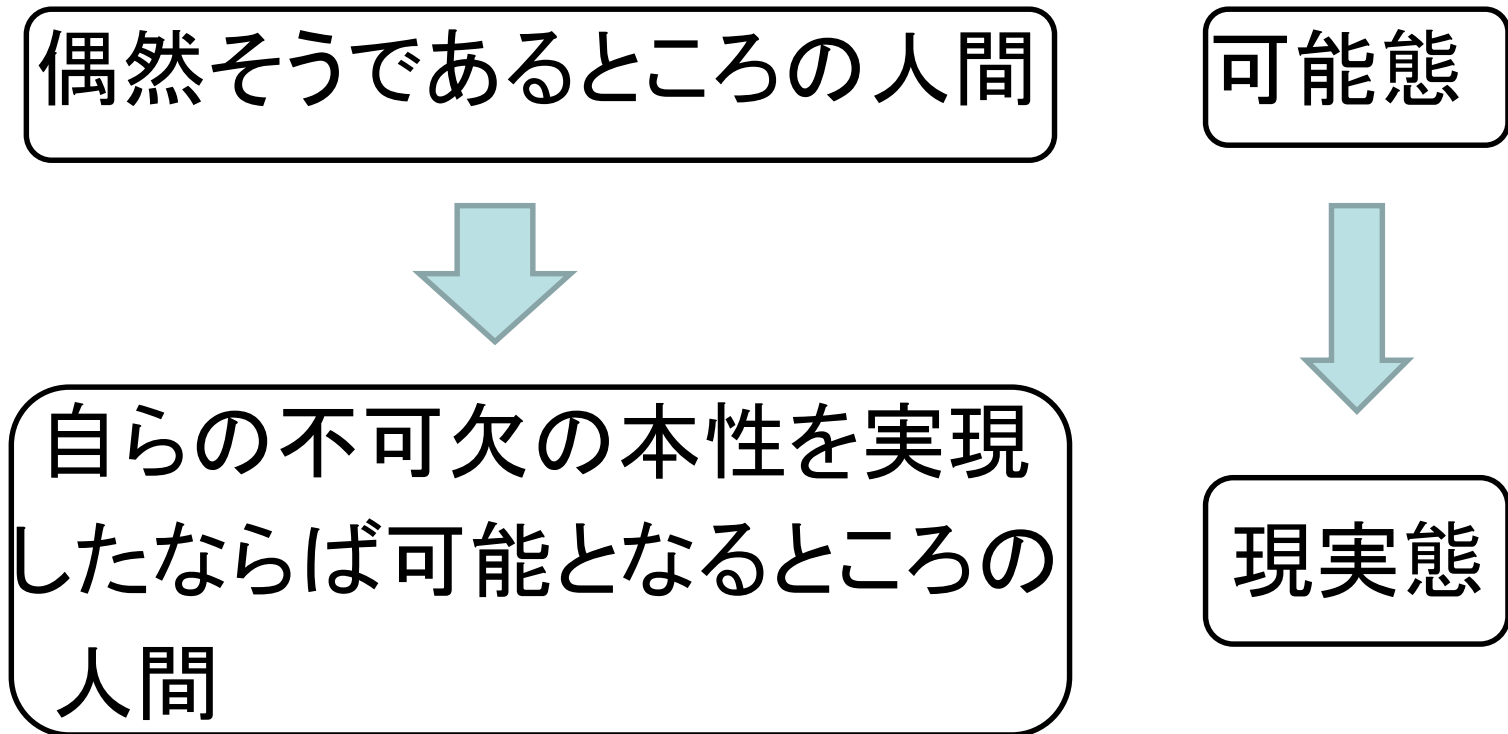
近代啓蒙主義者の人間理解における 目的論の欠如

- カント等の近代の啓蒙主義者の人間理解には**目的論**が欠けている。人間は道徳的人間になるのであり、道徳的人間になるプロセスを欠いて、命令によって人間を強制的に道徳的人間にさせることをマッキンタイアは批判する。アリストテレスが『ニコマコス倫理学』の中で分析したものの目的論的な枠組みのうちには、「**偶然そうであるところの人間**」と「**自らの不可欠の本性を実現したならば可能となるところの人間**」の根本的な対照がある。→続く

道徳的枠組みの基礎的な構造

倫理学とは、前者の状態から後者の状態への移行の仕方を人びとに理解させるべき学である。さまざまな徳を命じ、それと対をなす悪徳を禁じる教えは、可能態から現実態への移行の仕方を、つまりわれわれの本性を実現し、真の目的に到達するその仕方を教示してくれる。
→続く

[補足]アリストテレスの目的論的な枠組みの図解



それらの教えを無視するならば、われわれは挫折し不完全となる。すなわち、**理性的幸福という善**を成就し損なう。われわれの欲求や情動は、そうした教えを用いることによって、そして倫理学の学習が指示してくれる**行為習慣を養う**ことによって、秩序づけられ、教育される。そして、理性が、われわれの真の目的は何か、およびいかにしてそこへ到達するかを教示してくれる。われわれは三要素からなる枠組みを目の当たりにしている。→続く

この枠組みにおいて、「偶然そうであるところの人間本性(未教化の状態における人間本性)は、初めは倫理の教えと一致・調和しておらず、実践的な理性と経験からの教示によって、「自らのテロス〔目的〕を実現したならば可能となるところの人間本性」へと形を変える必要がある。こうして、「未教化の人間本性」、「理性的な倫理学の教え」そして「自らのテロスを実現したならば可能となるところの人間本性」という三つの概念が区別される。 →続く

[補足]倫理学の三要素

偶然そうであるところの人間本性(未教化の状態における人間本性)



理性的な倫理学の教え



自らのテロスを実現したならば可能となるところの人間本性

近代の啓蒙主義での目的論の除去

- 近代の啓蒙主義において、「**自らのテロスを
実現したならば可能となるところの人間**」と
いった観念は除去されてしまった。倫理の全
要点は、人間に現在の状態から自己の真の
目的への移行を可能にさせることにあるのだ
から、本質的な人間本性といった観念を除去
し、それとともにテロスという観念を放棄して
しまえば、そこに残されるのは、その関係が
まったく不明瞭になった残る二つの要素から
構成されたある道徳枠組みとなる。→続く

- 一方の要素は、ある種の道徳内容、つまり目的論的文脈を奪い取られた一揃いの命令であり、他方の要素は「あるがままの未教化の人間本性」についてのある種の見解である。
(マッキンタイア『美徳なき時代』)

(3) 古代世界での諸徳

ギリシア英雄社会における諸徳

後に「徳」(virtue)と翻訳されるようになる、「アレテー」(aretê)という言葉は、ホメロスの叙事詩においては、あらゆる種類の「卓越性」を表わすために用いられている。古代ギリシアにおいては、人間の生は一つの確定した形、「ある種の物語」の形をもっていた。たとえば勇気を一つの徳として理解することは、たんに勇気がいかなる仕方
で性格の中に示されるのかのみならず、それが
ある種の演じられた物語の中でいかなる位置を
もちうるのかをも理解することである。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

われわれが英雄社会から学ばねばならないことは二つある。第一は、あらゆる道徳はつねにある程度、「**社会的な地域性と特殊性**」に結びつけられているので、近代の道徳がもつ、あらゆる特殊性から解放された「普遍性への熱望」は幻想である。第二は、ある伝統の要素としてでなければ、諸徳を所有する方法はないということである。その伝統の中でわれわれは、英雄社会が最初の位置を占めている一連の先行諸社会から、諸徳とそれらについての理解とを受け継ぐ。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

(4) アリストテレスの徳論

- アリストテレスは単に個人の理論家としてではなく、**一つの長い伝統の代表者**と見なされる。あらゆる活動、あらゆる探求、あらゆる実践は、**何らかの善(good)**を目指している。アリストテレスは、地域的・特殊的でありながら、ポリスの諸特徴に根ざし、同時に宇宙的・普遍的でもある善そのものを説明するという仕事を、自分自身に課している。(マッキンタイア『美德なき時代』)

a. 善と徳

- 人間にとって**善そのもの**とは何か。アリストテレスは善に、「エウダイモニア」という名を与えるが、それは至福、幸福、繁栄等々と翻訳される。それは「善くあること」、そして「善くあることにおいて善く行為すること」という状態であり、人間が神との関係において自分自身「十分に恵まれている」という状態である。諸徳とはまさに、それを所有することで個人がエウダイモニアを達成できるようになる特質であり、それを欠くことでそのテロスに向かう個人の運動が挫折してしまう特質である。(マッキンタイア『美德なき時代』)

- **諸徳**は、特定の仕方で行為するだけではなく、「特定の仕方を感じる性向」でもある。有徳に行為するとは、カントが後に考えることになったような、傾向性に反して行為することではない。それは「**諸徳の陶冶によって形成された傾向性から行為すること**」である。「道徳教育」は、一つの「感情教育」である。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

思慮(プロネーシス)

- 諸徳のなかで中心的な徳は「**プロネーシス**」(**phronêsis**)[**思慮**]である。その言葉が特徴づける人は、自分にふさわしいことを知っている人が、誇りをもって自分にふさわしいことを要求する人である。それはもっと一般的に、**個々の場合にどう判断力を行使するかを心得ている**人を意味することになる。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

b. 諸徳、人生の統一、伝統

- **諸徳**は、諸実践を維持してそれらに内的な善を達成することを可能にするだけでなく、善そのものを求める重要な探求の中でわれわれを支えてくれる**素質**として理解されるべきである。私が何であるかは、その主要な部分において、「**私が相続しているもの**」である。それは、現在の私にある程度まで現存している特定の過去である。私は「**ある歴史の一部**」として自己を経験している。それは、自己を「**ある伝統の担い手の一人**」と見ることである。(マッキンタイア『美徳なき時代』)

3.4. リベラリズム、リバタリアニズム、コミュニタリアニズム

(1) ロールズとノージックの立場の相違点と共通点

- サンドエルはロールズとノージックの立場の相違点と共通点を次のように論じている。実践的な観点からは、ロールズとノージックの立場は明瞭に対立している。福祉国家リベラルなロールズと、リバタリアン保守主義者のノージックは、少なくとも分配の正義の争点に関しては、非常に明瞭な選択肢において立場を異にしている。とはいえ、哲学的な観点から

- は、二人には**多くの共通点**がある。二人とも、**功利主義にはっきりと異議を唱え**、それが人格間の区分を否定していることを根拠にして拒否している。その代わりに、二人とも、**権利を基礎とする倫理学**を提示し、それによって個人の自由がより完全に確保されるとしている。ノージックによる権利の説明は、ロックに多くを負うとはいえ、二人とも、**各人をたんなる手段ではなく、目的として扱うべきであるとのカントの準則に訴え、それを具体化する正義の原理**を求めている (サンデル『リベラリズムと正義の限界』)。

- 二人の理論家とも、ロールズのいう「人びとの多元性と独自性」や、ノージックのいう「われわれが別々の存在であるという事実」を強調する。このような中心的な道徳的事実によって、功利主義が否定され、個人主義的で、権利を基礎とする倫理学が肯定されている。とはいえ、ロールズは、社会的・経済的不平等がもっとも恵まれない者の便益になる限り認める、正義の理論に到達するのに対し、ノージックは、再分配政策をまったく排除し、自発的な交換や移転だけから成立する正義を主張する(サンデル『リベラリズムと正義の限界』)。

リベタリアンの哲学

- **リベタリアンの哲学**はいろいろな側面をもっている。経済政策については**自由放任主義**を好む保守主義者はリベタリアンと意見が一致するが、学校での礼拝、妊娠中絶、ポルノ規制などの文化的問題についてはリベタリアンと意見を異にすることが多い。リベタリアニズムが、最小国家が望ましいとしながらも、国家の力であらゆるものを市場に委ねようとするのが正義だと考える限り、リベタリアニズムは**市場原理主義**、**新自由主義的な経済政策の基盤**となる。

- 一方、リベラリズムの立場を取る、福祉国家支持者の多くは、ゲイの権利、性と生殖に関する女性の決定権、言論の自由、政教分離といった問題についてはリバタリアン的な見解と重なる(サンデル『これからの「正義」の話をしよう—いまを生き延びるための哲学—』)。

ノージックとロールズ(ムルホールとフウィフトによる対 比)

- **ロールズの理論に対するノージックの異議申し立ての本質は、ロールズの理論の再配分の側面が財産と自己所有という個人の権利に対する侵害を含んでいるということである。**ノージックの見解では、ロールズおよび再配分的福祉国家(redistributive welfare state)を支持するすべての人びとは、個人を十分真剣に受け止めていない。(続く)

- ということも、そうした人は、ある個人たちのものである才能を、そのような才能を欠いている別の個人たちのもつ目的に対する手段として利用することを含む、**強制労働と類似した課税システムを構想する**用意があるからである。**ノージックのリバタリアニズム**は、したがって、**個人の自由に対して、ロールズが承認するよりももっと大きな尊重を要求することを含んでおり、第一義的には、リベラルなパッケージの福祉国家的要素に対応する、ロールズの理論の配分的で準平等主義的な側面に対する拒絶として提出されているのである(ムルホール・スウィフト『リベラル・コミュニタリアン論争』)。**

(2)リベラル・リバタリアン・コミュニタリアンの相互関係

- リベラル、リバタリアン、コミュニタリアンの相互の関係。ある意味ではリバタリアンの批判とコミュニタリアンの批判は、**異なった方向から由来している**と同時に、**現代のリベラルな理論がもつ異なった要素に関心を向けている**。

- リバタリアンたちにとっては、ローズの理論の配分的側面は個人とその自由を十分真剣に受け止めていないのに対して、コミュニタリアンたちにとっては、ローズが個人の自由に与えている重要性は、彼が個人をその共同体よりも優先するという誤りを犯していることを露呈している(ムルホール・スウィフト『リベラル・コミュニタリアン論争』)。

三者の関係

これら三者の間関係は限定を必要とする。第一に、多くの点でノージックのリバタリアニズムはリベラリズムの拒絶というよりもむしろリベラリズムの一つの変種(version)として最もよく理解される。ロックがその最善の実例である古典的なリベラリズムの本質が自己所有に関する主張である限り、その場合にはノージックこそが真のリベラルであり、ロールズは修正主義者であると論じるのがもっともであるかもしれない。

- 第二に、**ロールズのリベラリズムの配分的側面**を、**個人と共同体の関係についての主張**という観点から述べることも可能である。ところがその場合には、ロールズは、人びとの才能をある意味で**共同の財産(common property)**とみなしている点で**コミュニタリアン**になるのである。こうしてロールズは、**配分をめぐる問題に関してはコミュニタリアンとして**、しかし**共同体との関係における個人の自由をめぐる問題に関してはリベラルとして最もよく理解されるのである**(ムルホール・スウィフト『リベラル・コミュニタリアン論争』)。

コミュニタリアンの批判

- コミュニタリアンの批判は、リベラリズムの平等に関係する側面ないし配分的側面によりも、リベラリズムの自由に関係する側面に関心をもってきた。実質的な政治的争点という観点からいえば、このことが意味するのは次のことである。すなわち、配分的リベラルとリバタリアンとの論争が福祉国家の正当化可能性と福祉国家を賄うための課税の正当化可能性とを中心としているのに対して、リベラルとコミュニタリアンとの論争はむしろ、

- 個人がメンバーである共同体ないし社会の価値やコミットメントと衝突する場合でさえ、個人が自分自身の人生を選択し、自分自身を自由に表現するという、**個人の権利の重要性**に関心を向けているということである(ムルホール・スウィフト『リベラル・コミュニタリアン論争』)。

レポートの予告

- 提出期限：7月18日(木)午後5時30分厳守
- 提出場所：総合科学部学務系のレポートボックス
- 提出しないと単位を落とす可能性がありますので、注意してください。
- 配布のA4の用紙に記入すること！（もしくは配布の書式に合わせて作成した用紙でもよい）